

大蛇の腹薬～酒井明 説話集32※～

ある日、お坊さんが帰り道の坂道を登っていると、むこうから大きな悲鳴が聞こえました。

お坊さんが駆けつけてみると、そこでは恐ろしいことが起こっていました。一匹の大蛇が、もうおおかた悲鳴の主を呑みこんでいます。お坊さんにはもうなにもできません。隠れながら、大きな腹をした大蛇のあとをつけて行きました。

大蛇はとある木の側でその葉を食べ始めました。するとどうでしょう、大きな腹がみるみる小さくなったのです。それを見たお坊さんはその木の葉を一杯ちぎってふところに入れました。

別の日、ある家でお経をあげた後、ご馳走をいただくことになりました。

そのとき、蛇の腹ごなしの薬のことがちらりと頭を横切ります。

「よしどんなにたくさん食べても、あの葉っぱがあるから大丈夫だ」と思った坊さんは、食べる、食べる。

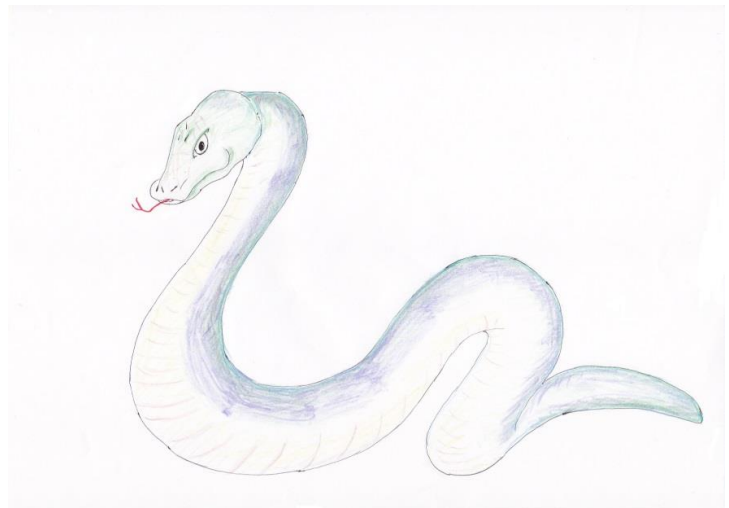
満腹になり座をはずした坊さんは、裏山へ登って葉っぱをむしゃくしゃと食べました。

するとどうしたことでしょうか、坊さんの体がみるみるとけ始めたのです。

あっという間に衣だけが土の上に残りました。

坊さんがいないのに気づいた人達が、その衣を見つけたのは、しばらくたってからでした。でも坊さんがどうなったのか、誰にもわかりませんでした。

大蛇のたべた葉っぱは人間をとかす薬だったということです。



※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会（当時）長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。